

小説・児童文学

たじゅんこ
田島準子

山口市
(1903～2002)



(提供・星野由久子)

【著作】

『青雲』(昭和15・六藝社)

『新しき岸』(昭和17・新元社)

『風雪の道』(昭和55・芳流文庫)ほか

【閲覧情報】

山口市立山口図書館

山口県立大学附属郷土文学資料センター

田島準子は、山口市大内御堀出身の小説家、児童文学作家である。女学校卒業後、小説家を目指して雑誌『文藝春秋』『婦人公論』などの懸賞小説にみずからの創作をたびたび投稿し、すでに昭和初年代には文壇周辺でその名が知られる存在となっていた。

昭和戦前期は、宇野千代、林芙美子、吉屋信子、中本たか子など、多くの山口県出身の女性作家が文壇で活躍した時代だったが、田島準子もまた、昭和八年(一九三三)十一月、雑誌『婦女界』附録として刊行された『女性作家二十二人集』に小説『蜜柑畑にて』を掲載し、同時代の女性作家として、その名を連ねていた。そして昭和十五年(一九四〇)一月、東京朝日新聞社が公募した創立五十周年記念懸賞小説に、長篇小説『青雲』が佳作入選したことは、小説家田島準子の名を広く知らしめることとなった。この『青雲』は、同年十二月六藝社から書き下ろし刊行されており、山口市の大内御堀に暮らしていた準子が、「Y町は、静かなよい所だけれども、私の抱いてゐる無限の欲望に対しては、余りに狭すぎる。私は広い世界で、かねての望み通り、全力を尽して、縦横無尽に働いたり、考へたり、努力したりしたいのだ。」(第七章)と、上京を模索していた時期を、自叙伝的に描いた長篇小説であった。

戦後は、小学館の学習雑誌への寄稿を契機としながら、しだいに年少者向け読み物の世界に進んでゆき、数多くの児童文学の紹介に携わることでその著作を積み上げていった。このように児童文化の振興に尽力した田島準子は、日本児童文芸家協会評議員も務めている。

こうした田島準子の執筆活動は、文壇から児童文学へと活動の軸足を移しつつも、大正末期から戦後復興を遂げた昭和期の終わりまで、実に半世紀以上に亘る、息の長いものだった。その書き続ける女性作家の姿勢というものは、きわめて貴重で、これからもなお、その生涯と執筆活動に光があてられてゆくべき山口県出身の作家のひとりである。

(文・加藤禎行)



『青雲』『新しき岸』



『ピーター・パンとウェンディ』(J.M. バリ作、田島準子訳)

田島準子 年譜

(提供・加藤禎行)

明治36(一九〇三年)	二六歳	10月10日、山口県山口市大内御堀に、鉄道官吏和田宇吉のもとに一男二女の長女として生まれる。本名は寛。父親が任地を転じるのに伴い、各地を転居しながら育つ。
大正11(一九二二年)	一九歳	3月、大阪府立大手前高等女学校卒業。
大正12(一九二三年)	二〇歳	10月、小説『暗い乳房』を雑誌『文藝春秋』に掲載。
大正14(一九二五年)	二二歳	12月、小説『隠岐の女』が懸賞小説当選作として雑誌『文章倶楽部』に掲載される。
大正15(一九二六年)	二三歳	5月、小説『密輸入』が懸賞小説当選作として雑誌『文藝春秋』に掲載される(募集記事は前年11月)。掲載号の『編集後記』では、「○本号掲載の懸賞小説の作者は、山口県山口市御堀二四九、和田宇吉方 田島準子」/「今迄の当選作とは傾向に於ても随分違つてゐる。しかも此新しき感覚の持主が、女性である事は一つの驚異である。」とある。
昭和4(一九二九年)	二六歳	11月、「二頁実話/昌圖出兵餘話」を雑誌『文藝春秋』に掲載。
昭和5(一九三〇年)	二七歳	10月、小説『街の子』を雑誌『婦人公論』に掲載。
昭和7(一九三二年)	二九歳	5月、雑誌『婦女界』附録『女性作家二十二人集』に小説『蜜柑畑にて』を掲載。この巻末自筆略歴では現住所が「東京牛込区築土町卅一、二見アパート」と掲げられた。
昭和8(一九三三年)	三〇歳	11月、雑誌『靴音』を雑誌『政界往来』に掲載。
昭和10(一九三五年)	三二歳	5月、小説『靴音』を雑誌『政界往来』に掲載。
昭和13(一九三八年)	三五歳	1月、東京朝日新聞社創立五十周年記念懸賞小説募集において、「青雲」が佳作入選を果たす。当選作は大田洋子「桜の国」。12月、長篇小説『青雲』が、書き下ろし長篇小説新鋭作家叢書の第五冊として六藝社から刊行される。
昭和15(一九四〇年)	三七歳	6月、短篇集『新しき岸』が新元社から刊行される。本書は、「新しき岸」「残された人」「椰子の家」「夜の散髪」「青き眉」「若き日」「友の秘密」「詩人と恋」の八篇を収録する。
昭和17(一九四二年)	三九歳	8月、随筆『私の自転車』を『少女倶楽部』に掲載。この年、井上芳佐と結婚。
昭和18(一九四三年)	四〇歳	1月、随筆『よし子ちゃんのげた』を『少女倶楽部』に掲載。
昭和19(一九四四年)	四一歳	6月、「抒情小説/あこがれ」を『少女の友』に、6月、「抒情小説/ブルウ・リボン」を『少女の友』に掲載。
昭和24(一九四九年)	四六歳	6月、「抒情小説/うるむ瞳」を『少女の友』に、10月、「少女小説/百合子と安子」を『小学六年生』に掲載。
昭和25(一九五〇年)	四七歳	1月、「少女小説/京子のたこあげ」を『小学四年生』に、2月、「少女小説/花のささやき」を『女学生』に、5月、「世界童話めぐり山椒太夫」を『小学六年生』に、8月、「少女小説/なでしこ姉妹」を『女学生』に、10月、「世界童話めぐりアラジン」を『小学六年生』に、11月、詩「落葉」を『小学六年生』に掲載。以降も年少者向け雑誌に多数の執筆を行っている。
昭和26(一九五一年)	四八歳	1月、「少女の素顔 私の生活ノートより」を『女性教養』に、4月、「友をつくる一つの方法」を『女性教養』に、5月「女性文化人の面影 生田花世女史」を『女性教養』に、10月、随筆『主婦の不平』を『女性教養』に掲載。
昭和28(一九五三年)	五〇歳	9月、随筆『主婦の不平』を『女性教養』に掲載。
昭和30(一九五五年)	五二歳	10月、随筆『主婦の不平』を『女性教養』に掲載。
昭和32(一九五七年)	五四歳	少年少女物語文庫9『アルプスの少女』を集英社から、なかよし絵文庫9『母をたずねて』を偕成社から、児童名作全集67『三つの金のりんご』を偕成社から刊行。
昭和33(一九五八年)	五五歳	新選世界名作選集『若草物語』を東光出版社から刊行。以後も、翻訳を中心に年少者向け読み物の刊行に数多く携わる。
昭和55(一九八〇年)	七七歳	10月、長篇小説『風雪の道』を芳流文庫から自費出版する。発行元として刊記に掲げられた住所は「東京都新宿区若松町120」。
昭和57(一九八二年)	七九歳	8月、翻訳『ピーター・パンとウェンディ』が立風書房から刊行される。
平成14(二〇〇二年)	九八歳	3月27日、死去。

道代は上京する友達を駅へ送つて、一人でぶら／＼川土堤を帰つて来た。爽やかな、秋日と呼ぶにふさはしい日であった。空は一面に蒼く澄んで、時々、冷気のまじった風が吹いて来る。山の向ふに、いま出て行つた汽車の煙がうつすらと棚引いてゐる。彼女は、いそ／＼と出發して行つた友達の克子(かこ)のことを考へた。克子は、たゞひたむきに東京をめざして、そこにだけ求める幸福があるかのやうに走つて行つた。だが、自分はどうだらう? 自分はこれからどうなるのだらう?

克子は汽車のデッキに立つて、道代の手を強く握りしめ乍ら、

「あなたは余つぽど煮え切らない人ね。吠えかゝる犬に、片ツ端から石を投げてゐたら、いつまでたつても目的地につくことは出来なくてよ。」と云つた。

(ほんとうだ。私には、決断力といふものがまるでないのだ)と、道代は心の中で呟いた。

橋を渡つて、狭い町並を一丁ばかり来た時、外郎屋(ういろうや)の店先で、兄の圭一(けいち)が茶をのんでゐるのを見た。

(田島準子『青雲』第一章冒頭部)

田島準子